プレスリリース　［　令和６年１１月１３日　］　　（計　　３枚）

第３３回全国救急隊員シンポジウムで
５年連続 加賀市消防本部が選ばれ発表を行います

全国救急隊員シンポジウムは、全国の救急隊員等を対象とした実践的観点からの研究発表や最新の医学知識を学ぶ場を提供することにより、消防機関の行う救急業務の充実と発展に資することを目的としています。（シンポジウムＨＰより一部抜粋）

今年で第３３回を迎え、全国から多くの消防機関を中心とした医療従事者が参加する大規模で歴史あるシンポジウムです。全国の消防機関の注目度も高く、本シンポジウムの演題発表には査読委員会における厳正な審査があり、当市消防本部の救急活動や検証成果が採用されたことは大変意義あることです。

なお、本研究発表に際しては河中拓郎（かわなかたくろう）救急救命士が研究を行い、富山大学 北越地域医療人養成センター 清水光治（しみずこうじ）特命助教、富山大学 医学教育学講座 近藤諭（こんどうさとし）助教より助言をいただいております。

記

【第３３回全国救急隊員シンポジウム概要】

開 催 日　令和６年１１月２１日（木）、１１月２２日（金）
開 催 地　秋田県秋田市
会　　場　あきた芸術劇場ミルハス　（秋田市千秋明徳町２番５２号）
　　にぎわい交流館ＡＵ（あう）　（秋田市中通一丁目４番１号）
　　秋田市文化創造館　（秋田市千秋明徳町３番１６号）
主　　催　秋田市消防本部　一般財団法人救急振興財団

【加賀市消防本部の発表について】

発表時間　令和６年１１月２１日（木）１４時２５分～
発表内容　「地域住民ファーストレスポンダーの COVID-19 パンデミック後の活動再開への不安」
発 表 者　加賀市消防本部　大聖寺分署　救急救命士　河中（かわなか）　拓郎（たくろう）
発表会場　にぎわい交流館ＡＵ（あう）研修室１・２

本件へのお問合せ先
加賀市消防本部　大聖寺分署　担当：河中　TEL 0761-73-0119

「開催ポスター」

第33回
全国救急隊員
シンポジウム
AKITA2024
第33回
全国救急隊員
シンポジウム
AKITA2024
「敢為邁往（かんいまいおう）」理想を現実に変える旅のはじまり
～美の国・秋田から～
令和6年11月21日(木)22日(金)
あきた芸術劇場ミルハス（秋田市千秋明徳町２番52号）
にぎわい交流館AU（あう）（秋田市中通一丁目4番1号）
秋田市文化創造館（秋田市千秋明徳町3番16号）
秋田市消防本部
AKITA FIRE DEPT
主　催　秋田市消防本部、一般財団法人救急振興財団
後　援　消防庁、厚生労働省、秋田県、公益社団法人日本医師会、
一般社団法人日本救急医学会、一般社団法人日本臨床救急医学会、全国消防長会
特別協力　一般財団法人全国市町村振興協会
協　力　一般社団法人秋田県医師会、一般社団法人秋田市医師会、公益財団法人秋田県市町村振興協会
詳細は 第33回全国救急隊員シンポジウムAKITA2024 ホームページをご覧ください。
https://33akita99sympo.com/

「抄録集より抜粋」

O9-2　地域住民ファーストレスポンダーのCOVID-19パンデミック後の活動再開への不安

[1]加賀市消防本部／富山大学大学院総合医薬学研究科　先端医科学プログラム　救急医学、[2]富山大学　学術研究部医学系（医学）　北越地域医療人養成センター、[3]富山大学　学術研究部医学系（医学）　医学教育学講座、[4]富山大学　学術研究部医学系（医学）　医師キャリアパス創造センター

河中　拓郎[1]、清水　光治[2]、近藤　諭[3,4]

【目的】
当消防本部では加賀市塩屋町で地域の有志により全国初となる住民によるファーストレスポンダー（以下、FR）体制が発足して間もなく12年を迎える。COVID-19の影響により、令和2年4月からの4年間、活動を休止せざるを得なかった。令和6年度から活動の再開にあたり救命講習を行った。COVID-19のパンデミックを経て活動を再開するFR隊の心理的安全を支援することを目的にCOVID-19のパンデミック前および救命講習前後におけるFR制度の活動再開に対する不安について、意識調査を実施した。
【対象と方法】
対象：加賀市塩屋町の地域住民であるFR隊員
方法：質問紙調査
質問紙：人口統計学的データ（性別、年齢、職業）、FR所属年数
COVID-19パンデミック前および救命講習前後の3時点における不安※
①心肺蘇生法の技術面に対する不安
②感染症に対する不安（COVID-19等）
③体力面（年齢等）に対する不安
※質問項目「不安を感じる」に対して、あてはまる＝5、ややあてはまる＝4、どちらともいえない＝3、あまりあてはまらない＝2、あてはまらない＝1の5段階尺度で回答した。
統計解析：対応のあるt検定（有意水準p <0.05）　JMP ver.17 for Windows
【結果】
・FR隊全隊員数21名中14名回答（男性9名、女性5名、平均年齢層50歳代、平均FR所属年数9.5±4.1）
・COVID-19パンデミック前および救命講習前後の3時点における不安
①心肺蘇生法の技術面に対する不安
COVID-19パンデミック前後（2.57 vs 2.71, p = 0.25）、救命講習前後（2.71 vs 2.07, p < 0.05）
②感染症に対する不安
COVID-19パンデミック前後（2.07 vs 2.43, p = 0.17）、救命講習前後（2.43 vs 1.93, p = 0.06）
③体力面に対する不安
COVID-19パンデミック前後（1.93 vs 2.14, p = 0.09）、救命講習前後（2.14 vs 2.29, p = 0.27）
【考察】
今回の結果から、COVID-19パンデミック前後では有意差はないものの、すべての項目で不安が増大していることが示された。さらに救命講習会前後では、心肺蘇生法の技術面に対する不安の有意な変化を認め、救命講習は技術面に対する不安の低減効果があると考えられる。一方、救命講習会後に、感染症に対する不安の低下する傾向が示唆されたが、有意差は認められなかった。そのため、感染症への不安の低減が得られるように救命講習内容の改善・構築が今後の課題である。FR制度の維持・向上のため、心肺蘇生法の技術面への不安低減効果の向上と、感染症に対する不安低減可能な救命講習を定期的に提供することが重要である。